

祭り

祭りの日は、朝からよく晴れていた。

村の外れ近くに土地が痩せていて牧畜にも向かない小さな丘がある。その丘の上が広場になっていて、祭りに使われる。そこに村の若い人たちみんなで仕切りを作ったり、テントを張ったり、テーブルを運んだりして祭りの会場を作った。

祭りにはこの村の人だけでなく、近くの村からも人々が集まっていた。街からも商人が来ている。祭り好きで用もないのに近くの村から来ている者もいるし、少しでも小銭を稼ごうと、農作物や工芸品を担いでやってくる者もある。

夏至の祭りであるが、村によってその日は少しずつれている。夏至の日に祭りをする村もあれば、夏至の後の最初の満月に祭りをする村もある。何月何日に祭りをすると決めていて、その日はもとは夏至だったのかもしれないが、今では夏至からずれてしまっているという村まである。「ビールにミード、リンゴ酒にワインはいらんかね」

まだ準備作業中だというのにもう酒を売っている露店がある。準備作業をサボってビールを飲

んでいる若者もいる。祭りだということで腰が落ち着かずに早く来すぎて他の露店が開いていないので、仕方なくリンゴ酒を飲んでいる小父さんもいる。

リタは治療師から手伝わなくてよいと言われていたので、水色と白の柄の服を着てみた。久しぶりに着ると少し小さいし、なんだか不釣り合いな気がする。それでリタはやはり治療師の黒い服を着ることにした。これは毎日着ているので体に馴染む。

お母さんはお菓子の露店を出すし、サラもなにかしているようだったので、豚飼いのペタニ小母さんと一緒に丘の広場に行った。その頃にはもう露店も揃っていて、広場は人で賑わっていた。

ペタニ小母さんはリタに誘われたので、はしゃいでいた。

「リタ、ビールでも飲むかい。おごってあげるよ」
「あたしお酒はまだいいわ。一度飲んだけどひどいことになったから。もっと大きくなってからにするわ」

「そうかい、じゃあ、お菓子でも買ってあげようか。お母さんのお菓子はいつでも食べられる

だろう。街の商人が何か珍しいお菓子を売っていないか見てみようじゃないか」

二人で露店を見ていくと、マルカ母さんがお菓子を売っている店が先に見つかった。堅焼き菓子の小さなのを一つ貰う。

「他のお菓子の味を見てくるわ」

そう言つて立ち去り、少し先に人だかりがしていたので近寄つてみる。

「さあ、さあ。王家御用達のお菓子だよ。とろけるように柔らかく、酔うほどに甘いお菓子だよ」
リタはその商人の並べているお菓子を見てみたが、どれも見たことがあるものばかりだった。でもお母さんのお菓子と味を比べてみようといつずつ食べてみた。

お母さんの味つけとはちょっと違う風味があるが、だからといつておいしいとは言えない。味に優劣はなく、風味が違うので人によって好みに分かれるだろう。

「なんだい、マルカのお菓子のほうがおいしいじゃないか。高いばっかりだね」

ペタニ小母さんはそう言つが、リタはちょっと変つていておいしいと思つた。

「おや、これはなんだらう。生姜の砂糖漬けだつ

てさ。どんな味だろうね」

リタも興味を持ったので買ってみる。薄く切った若い生姜を砂糖に浸けただけのお菓子のようだ。

「なんだい、からいよ」

「甘いけど、からいわね。でも、おいしいと思
うわ」

リタがもう少し買おうとすると、つまみ食いた分も含めて、ペタ二小母さんがお金を払ってくれた。

「そんなものが好きなのかね。まあ、確かにあんたは、前から変った娘だったよ」

「刺激的でおいしいわよ。癖になりそうね」

二人はそれからカラタ姉さんやサラのいるお話の天幕に行ってみた。他のはテーブルや台を出してあるだけだが、お話の店は天幕を張ってあって、外のざわめき声が響かないようになって
いる。

お話は何人もが順番にするようで、知らない人が話をはじめるところだった。

「あたしここでお話を聞きたいんだけど、ペタ二小母さんはどうする？」

「あたしゃお話は退屈だから他をまわるよ。しばらくは広場にいるから、お話が終ったら探し

ておくれ」

明るい外から、急に天幕の中に入ったので、最初はまわりがよく見えなかったが、目がなれてくると、カラタ姉さんとサラが並んで座っていた。隣に行つて声をかける。

「こんにちは」

「ああ、リタ。あたしたちの順番はまだなのよ」
カラタ姉さんが小声で答える。

「でも、他の人の話を聞くのもいいものよね。ここに座つて一緒に聞かない？」

リタは二人の隣に座つた。よく見ると地面の上に藁の束が置いてあり、お客はその上に座るようになっていている。中央にだけ椅子があつて、そこに知らないお婆さんが座つていた。

カラタ姉さんは近くの村のお婆さんだという。お婆さんは手に鈴を持っていて、それを鳴らしていた。シャラランという音が天幕の中に響く。「さあさ、さあさ、お話の始まりじゃよ。この鈴が鳴ったらお話が始まるじゃがね。もう始まりじゃよ。さあさ、早くお入りじゃ」
シャララン、シャララン。

始まるのかと思つてしているとまた同じことを言う。

「さあさ、さあさ、お話の始まりじゃよ。この鈴が鳴ったらお話が始まるじゃがね。もう始まりじゃよ。さあさ、早くお入りじゃ」

シヤララン、シヤララン。

リタが不審に思っていると、サラが説明してくれた。

「さつきからずっとこうなのよ。きつと、お客が集まるのを待っているのね」

しかし、もうこれ以上客は入らないと思ったのか、お婆さんは鈴を鳴らすと本当に話しはじめた。

こりゃあずつと昔の話じゃよ。儂が生まれるよりずっと前じゃでな、儂の婆ちゃんが生まれるよりもっと前のことかも知れんて。ほんにずいぶん前のことじゃよ。

この世にな、魔法使いちゆうもんがいたそうじゃ。そりゃあすごいもんじゃでな、魔法使いちゆうもんは、「じよ」って呪文を唱えるだけじゃな、石の雨を降らせたりじゃな、雷を落したりじゃな、大風を起したつちゆうことじゃよ。

もつとも儂に言わせりゃあ、そんなことが出来

たところでな、何の役にも立ちやあせんわな。麦の稔りが良くなるちゅうわけでもなけりやあな、牛の乳の出が良くなるちゅうわけでもないでな。ま、せいぜい見世物だわな。

しかしじゃな、帝国軍がやってくるようになってな、世の中物騒になったもんじゃわな。つまり戦争ちゅうもんが起こったわけじゃな。まあそれ以前も小競り合いはあることはあつたんじゃがな、本格的な戦争ちゅうもんは帝国軍が来てからじゃよな。

なにしろ帝国軍は弩ちゅうもんを持ってきてヒュンヒュン、ヒュンヒュン大石を飛ばしてくるもんじゃから敵わんわな。そんじゃな、ふと思ひ出したわけじゃな、石を降らせるやつならこつちにもいるつてもんじゃで。

それまで見世物扱いじゃつた魔法使いを呼んできてじゃな、ほれ、石降らせてみる、ほれ、雷落としてみる、ほれ、大風吹かせてみるちゅうても、そりやあ連中もへソを曲げて動かんわな。そんじゃで、まあ酒を吞ませたりな、うまいものを食わせたりしてな、あわてて機嫌をとったちゅうことじゃな。まあそれ、魔法使いにとつても帝国軍は敵じゃでな、いつまでもへソを曲

げているつもりは元からなかったのじゃろうて、やがて魔法使いも戦いに出ることを承諾したのじゃよ。

そりゃあ派手な見物じゃったよ。帝国兵の上じゃあ、石の雨が降るわ、雷は落ちるわ、大騒ぎじゃったそうな。そんななあ、帝国軍が川を渡ろうちゅう時にはじゃな、川上からどどどどどどどどどどちゅうもん凄い音と共に大水さ流れてきてじゃな、たちまち帝国兵を押し流してしもうたちゅうことじゃでな。帝国軍もこれには相当参ったらしいでな。

そうはいうてもな、帝国人じゃて馬鹿じゃあないわな。どっちかつちゅうとずる賢いくらいじゃでな。やがて奇妙な事柄の大元には魔法使いがいるちゅうことを突き止めたんじゃな。

するつちゅうとじゃな、帝国人は和平を結ぼうちゅうたわけじゃ。こりゃあ偽りの和平じゃな。そうはいうてもな、贈り物をそりゃあたくさん持ってきたんじゃ。それも贅沢なもんばかりじゃな。ワインなんかもその頃入ってきたもんじゃな。

そりゃあ帝国は広いもんじゃからな、族長連中の見たこともないような珍しいもんがいくつらでもあるんじゃな。

族長連中だけじゃありやせんてな、狩人から農夫までもう村人はみんな帝国風の贅沢に憧れるようになってしもつたんじゃ。族長連中のおこぼれで食った帝国風の料理の味が忘れられんもんやら、族長夫人の首にかけられた宝石の輝きから目を離せんもんやらちゅう具合じゃな。

魔法使いだつて同じことじゃな。そんな具合になつたところにもつてきて、帝国の使者が魔法使いのところを訪ねたわけじゃよ。帝国で魔法使いを雇うちゅうてな。もう大方の魔法使いは喜んで帝国に仕えたつちゅうことじゃ。

そうなりやあな、もう和平はいらんちゅうて帝国は攻めてくるじゃろうが。族長どもが慌てたところで、もう魔法使いは半分もいやせんじゃな。

まあそりやあ派手な戦争だつたちゅうことじゃ。なんしろ、帝国側にも魔法使いがおるわけじゃし、族長連合にも魔法使いがおるわけじゃしな。こつちに石の雨がバラバラと降りやあ、あつちにはあ雷がゴロゴロと落ちるってな具合じゃからな。

見物としちゃあこれ以上の見物はなかつたじゃろうて。

まあ結局のところはあれじゃな、魔法抜きで武力で勝っておったわけじゃから、帝国軍が勝つのは分かり切ったことじゃったな。このあたりはもうみんな帝国の属領になってしまつたわけじゃ。

この話はその頃のことじゃな。戦争が終つて帝国の属領になつた後のことじゃよ。魔法使いが兵士と同じように街を歩いていた時代のことじゃ。

まあ戦争も物騒なもんじゃが、戦争が降りやあすくに平和になるかちゅうとそうもいきやせんのじゃな。職にあぶれた兵士やら魔法使いやらがそこいら中にいたもんじゃ。中には盗賊になつて旅人を襲つたりするもんのいたんじゃな。

さあさ、ここにアルちゅう名のな、そりやあ綺麗な少年が街道を旅していたのじゃよ。背はまだ伸び盛りじゃからちよつと低かったが、肌は透き通るように白くてな、鼻筋のとあつた綺麗な顔をしていたものじゃ。

まあ帝国の支配はいろいろ悪いこともあつたもんじゃがな、街道の整備ちゅうのは帝国の良いところと言えるかもしれんの。まあこの辺は舗装まではされちゃあいなかったさうだが、それでも広くて立派な街道が通つていたもんじゃ。

その街道をアルが一人で旅していたんじゃな。

こりゃあ盗賊にとつちゃあ格好の獲物じゃな。ここにいた盗賊は兵士くずれの連中じゃった。魔法使いくずれなら何か感じるものがあつたかもしれんがの。

少年の一人旅じゃあたいした金は持つちゃあせんだろつが、なあに、体が売れるつちゅうわけじゃな。こりゃあ帝国の悪徳つちゅうもんじゃな。帝国が来る前は、人の売買なんて考えはありゃあせんかった。

盗賊どもはアルの跡をずっとつけていってな、あたりに人影がなくなつたところで、わつと襲いかかつて袋に放り込もうとしたんじゃな。

その時のことじゃ。小さな声でアルが何か呟いたのじゃ。

そこまで話すと、お婆さんは鈴をシャラランと鳴らした。魔法が使われたことを示す合図なのよとカラタ姉さんが囁いた。

空気の裂けるような音がしたかと思うと、小さな稲妻がいくつもアルの手の平から飛び出して、盗賊の一味に突き刺さつたのじゃ。そうすると、盗賊どもは体が痺れて動けなくなつたのじゃよ。

アルは盗賊どもを見下すようにして、地面に唾を吐くと歩き去ったのじゃな。

そうじゃ、アルは魔法使いじゃった。それも凄腕の魔法使いじゃな。腕に自信があればこそ一人旅だったというわけじゃ。盗賊どもがつけていることにも気がついておったのじゃな。

しかしな、人間気を付けにやあならんてな、自信ちゆうもんは自惚れに繋がるもんだし、そうなりやあ油断もするようになるてな。それになんちゆうてもアルは若かったてな、若者うちゆうのはそりやあ自惚れの強いもんじゃで。

それにな、人を見下すちゆうのはあんまりいいこつちやないてな。たとえ盗賊でもな、そりやあ自尊心ちゆうもんがあるてな。盗賊どもはなんとかアルをやつつけてやるうと思つたわけじゃ。

運の悪いことにな、盗賊の首領はまあ頭の切れる男じゃった。他の連中はその首領を頼つて集まつたようなものじゃてな。その首領の考えることにやな、罠を使えばいいじゃろつてな。

なんちゆうても、先の襲撃でな、アルの小さな稲妻は盗賊どもを痺れさせただけで、火傷ひとつ負わせていなかったのじゃな。つまりじゃな、もう一度襲つても命まで取らないじゃろつよ。

そんなら盗賊どもが囷になっても大丈夫じゃるうてな。

その上この首領の切れるところはな、新しい仲間を連れてきたことじゃな。二度目の襲撃は倍の人数で行なったのじゃな。アルにしてみればな、一度目で失敗したから単に人数を増やして襲撃してきたと見えたわけじゃよ。まさかその他に隠れているもんがあるとは思わんわな。

シャララン、シャララン、シャランラン。

またもや不思議な音がしたかと思うと、アルの手から放たれた稲妻が盗賊に当たったのじゃ。今度はよほど痛かったのか、盗賊どもは次々と悲鳴を上げて倒れおったな。

「懲りないやつらだ」

アルがちょうどそう言いかけた時のことじゃな。物陰に隠れていた首領が音もなく投石器を振ったのじゃよ。そして放たれた石はアルの脳天にドンとぶつかったのじゃ。アルはたちまち気を失ってしもうたのじゃ。

「気を失っちゃあ、魔法も使えまい」

首領はそう言うてからな、アルの口に猿轡をかませてな、更にアルをぐるぐると縛りあげたのじゃよ。そうしておいて、地面に倒れている手

下を蹴飛ばしたんじゃな。

「おい、いつまでも寝てないで、こいつを隠れ家に運べ」

盗賊どもは首領に蹴飛ばされて気がつくくと、体をさすりながら起き上がったな。それから、アルをかついで隠れ家に運んだわけじゃよ。

隠れ家に着くと、首領はアルを椅子に縛りつけると頭から水をぶっかけたんじゃな。

「さつきはよくもいたぶってくれたな。ガキの癖してよ。え、ちょっとばっかり魔法が出来るからって、いい気になってるんじゃねえぞ」

首領はそう言つてな、それからアルの顎を持ち上げて、顔を吟味したんじゃな。

「こいつはいいや、上物だぜ」

首領はそう言つてからな、下品な笑い声を上げたのじゃ。

「知ってるか、ローマ人は女より男が好きらしいぜ。特にお前ぐらいの若いのがな」

すると、盗賊たちは一斉に笑い声を上げてな、その声は狭い小屋の中に響いたのじゃな。

「そうは言っても魔法使いは貴重だ。どうだ、仲間にならないか？ 戦争が終つちゃあ魔法使いも仕事はあるまい、え。かわいがってやるぜ」

首領はアルの返事を聞こうとして猿轡を外しかけたんじゃな。するとたちまちアルは呪文の詠唱を始めたんじゃ。首領はあわてて猿轡をはめるわ、周りの手下はもう逃げ腰になっているわという具合じゃな。

「へつ。まったく正直な奴だな。嘘でも仲間になるって言えねえのかよ。これだから子供は使えねえってもんだ。仕方がねえ、売っちまえ」

そんなわけじゃな、アルは帝国商人に売られることになったのじゃな。まあ体は華奢な上に、顔はいいと来ているからな、首領のいったように男娼として娼館に売られたわけじゃな。

おっとその前に言うておかねばならんことがあるのじゃ。帝国商人はな、アルが魔法使いだと知るとそのままでは逃げられてしまうということじゃな、アルの舌を抜いてしまったのじゃ。

帝国では奴隷の舌を抜くというような残酷なことが、ちよくちよく行われていたということじゃな。たいていは主人の秘密を漏らさないようにということじゃな。

じゃでな、帝国商人は人間の舌をうまいこと引っこ抜く技術も持っていたし、そのあと死んでしまわないように治療をする技術も持っていた

たのじゃな。

そこまで話すとお婆さんは観客を見回した。

「よし、よし。男も子供もおらんよつじやな。そんなら女たちのために話すとするか」

そう言ってから、お婆さんはにやりと笑い、話を続けた。

アルの売られた先の娼館は大きな店でな、娼婦も男娼も扱っておったのじゃな。ああ、知らん人もおるかも知れんが、男娼ちゆうのはな男に抱かれる男の娼婦じゃな。

帝国にやあそつという趣味の男がぎょうさんおつたんじゃな。そりやあもう男娼を扱う娼館が繁盛するくらいはおつたわけじゃからな。なんちゆうても皇帝にじやてそつという趣味の男がなつたりもしたくらいじゃからの。

まあ娼婦のお勤めだつてそりやあつらいといつがの、男娼はそれ以上につらいものじゃつたそうな。なんちゆうても男のあそこはものを入れるようには出来ておらんでの。

まあいろんな男がアルの体をもてあそんだもんじゃ。太つた男じゃの、瘦せた男じゃの、若い

男じゃの、年老いた男じゃの。

娼館の得意客の中にじゃな、海運業で儲けている男がおったのじゃが、名前がオシウスちゆう男じゃった。このオシウスがアルを気に入って何度も相手をさせたんじゃがな、この男は娼館に余分の料金を払ってじゃな、アルの体を縛ったり、鞭打ったりしたんじゃな。

まあアルは堪らんじゃろうが、文句を言える立場にゃああらんで。もっともオシウスはアルに宝石やきれいな服なんかも買ってくれたんじゃが、そんなものアルには何の役にも立ちゃあせんでな。

ただオシウスにもまあ多少は理由があつてな。あれじゃな、オシウスは不能じゃったのじゃな。つまり男のアレが使いものにならなかつたのじゃ。じゃもんで、アルを抱く時にも指を突つ込んだり、張形を突つ込んだりじゃった。

終わりが無いじゃでな、そりゃあアルはつらかつたろうて。

それからな、アルを貰う女もおったのじゃ。これは帝国の將軍の未亡人でな、タルサつちゆう名前じゃったな。タルサは年老いた將軍の元に買われるようにして嫁いできた女じゃな。まあこ

れも可哀想な女なんじゃが、將軍が死んで財産を相続すると、これまでの仕返しなんだか、男娼を買おうようになったのじゃな。

買うちゅつてもな、タルサがアルを抱くのとは違つのじゃな。奴隷男を連れてきてな、その男にアルを抱かせて、それを見ているのじゃな。そうでなけりやあな、娼婦を買つてアルに娼婦を抱かせたりな、あるいはじゃな、娼婦のアソコに張形をくくりつけてな、それでアルを抱かせたりしたのじゃな。

どちらにしてもじゃ、アルは苦痛の声を上げたり、顔を歪めたりはしなかつたし、かといって快楽を味わっているわけでもなかつた。ただ無表情で耐えていたのじゃな。

とにかくアルは毎日ひどい目にあつておつたのじゃな。それでもアルは挫けなかつたのじゃよ。それはじゃな、魔法使いは特別に強い精神力を持つているからなんじゃ。邪道に走る魔法使いもおるがの、それは精神力が弱いからではなくてじゃな、知識への探求心が強すぎるからなんじゃな。

アルは魔法使いの中でも特に強い精神力を持っていたのじゃがな、探求心も非常に強かつたの

じゃな。そしてじゃな、男娼にひとつだけ良い点があるとすればじゃな、昼間はたっぷり時間があるということじゃな。

その昼の間にアルはいろいろなことを考えたわけじゃ。もちろん第一に考えたのはどうやって娼館から逃げ出すかということじゃったな。

第二に考えたのは復讐じゃった。オシウスとタルサの二人とじゃな、最初にアルを売った盗賊に復讐することをアルはいつも考えておったのじゃな。

第三に考えたのは魔法のことじゃった。娼館から逃げ出すにも復讐するにも魔法の力は必要じゃからな。それだけでなく、アルはもともと魔法の研究をしておったのじゃな。

呪文がどうやって魔法の効果を發揮するのかとというのがアルの以前からの疑問じゃった。そしてその疑問の答えを求めてじゃな、高名な魔法使いを訪ねる途中で盗賊に会ったというわけじゃな。

まあともかくアルは魔法について考えつづけたんじゃな。そしてふと以前に聞いた話を思い出したのじゃ。それは異国には呪符というものがあるちゅうことじゃった。紙に祈りを込めて文字を書いておくと、その紙が魔法の効果を發揮

するということなんじゃ。

そうすると、呪文は声に出して唱えなくても効果があるのじゃないだろうか。そんな希望がアルの頭に芽生えたのじゃな。そこでじゃな、アルは呪文を紙に書いてみたんじゃな。

紙とペンは娼館にあつて自由に使えたのじゃよ。それは娼婦がお客に恋文を書くために置いてあつたのじゃな。というのも高級娼婦の多くは文字の読み書きが出来たからじゃよ。

アルももちろん読み書きは出来たのじゃな。それは高級男娼だからではなくて、魔法使いだったからじゃよ。

しかしじゃな、アルの書いた文字は何の効果も發揮しなかつたのじゃ。そこでじゃな、アルはもう一度よく思い出してみたのじゃが、そうすると呪符ちゆうもんはどうやら特別な文字で書くもんで、その文字ちゆうのは一つの文字に一つの意味があるちゆうことなんじゃな。

もちろんアルはそんな特別な文字は知らなかつたのじゃな。それで文字はあきらめて、別の方法を考えたのじゃ。呪文ちゆうもんは大きな声で唱えても、小さな声で唱えても効果は変わらないんじゃな。それなら聞こえないくらい小さい声

でも、それとも全然声を出さなくても効果を発揮するんじゃないだろうかとね。

じゃが、それも駄目じゃったな。アルは何度も何度も試してみたのじゃがな、やはり声を出さずに頭の中で唱えただけでは魔法の効果は現れなかったのじゃな。

アルに出せる声となると「アー」とか「ウー」ちゅう舌を使わない声だけじゃった。そんな声だけで唱えられる呪文はなかったのじゃな。

それでもまだアルは諦めなかったのじゃ。魔法使いの精神力ちゅうもんはたいしたもんじゃの。次にアルが考えたことは身振りや手振りで魔法を使うちゅうことじゃった。

あれじゃな、ほれ、言葉の通じない相手になんとか物事を伝えようとする身振り手振りを使っじゃろが。ちゅうことは身振り手振りも言葉のようなもんじゃろが。

足の立ち方じゃの体の形じゃの腕の振り方、指の形。そんなもんをいろいろ工夫しての、なんとか呪文の意味を体で表そうとしたのじゃな。そしてこれがうまくいったのじゃよ。

そりゃあな全部の呪文がうまくいこと身振りで掛けられたわけじゃなかったのじゃがな。簡単な呪

文は身振りで掛けられるようになったのじゃな。

アルはそこで娼館を脱走することも出来たのじゃがな、何しろまだ仕える呪文は三つほどしかなかったのじゃなからな。捕まって指でも切り落とされたらもう二度と魔法は使えんじゃろ。アルはもつと強力な魔法が使えるようになるまで娼館で身振り呪文の研究を続けたのじゃな。

その間も、オシウスやタルサやその他の大勢の客がアルを抱きつづけたのじゃがな、アルは呪文が使える素振りも見せずにはた耐えつづけたのじゃよ。

しかしついにアルの復讐の日が来たのじゃ。

その日の客はタルサじゃった。アルはタルサの目に魔法を掛けたのじゃ、そしてタルサの目の映るすべてのものが醜くゆがんで見えるようになったのじゃな。

タルサはアルの顔が醜くなったのに戸惑っていたが、しばらくして鏡に映った自分の顔を見た時に心底驚いたのじゃよ。そのまま娼館を走り出してもうたのじゃ。

そしてオシウスの番じゃな。オシウスがアルを抱こうとした時、そのはち切れそうに大きくなった男のモノがじゃな、みるみる小さくしぼ

んでな、子どもものように小さくなり、腐った木の枝のようにポロリと取れてしもったのじゃ。玉だけあって竿なしじゃな。

その後オシウスがどうなつたかはアルもしらんのじゃが、竿がなけりや男だろつと女だろつと抱くことは出来んじやるつよ。ちゆうても玉が残つてちゃあ、やりたい気持ちはなくならんじやるつからの。なかなか大変じやるつて。

それからアルは娼館に火を着けて逃げ出したのじゃ。

帝国を逃げ出してこつちに帰ってきたアルじやつたが、盗賊の一味は既に役人に捕まっておつての、牢屋に入っておつたのじゃ。牢屋は石造りの頑丈なもんじやつたし、見張りも厳重じやつたな。

月のない夜のことじやつた。アルは魔法の力で体を抜け出して、牢屋の中の盗賊の首領の前に現れたのじゃ。アルの姿は幽霊のように半ば透けていたのでな、首領はついにアルが死んでしもつて、祟りに現れたのかと思つたのじゃな。

そしてアルは魔法の見えない力で、脅える首領の腕や足の骨を一本ずつ折つていったのじゃ。じゃが、途中で首領が気絶してしもつての。アルは急につまらなくなつて、大地を揺り動かし

て牢屋を潰してしもうたのじゃ。

首領も盗賊の一味も、巻き添えを食った看守もみんな一緒に潰れてしもうたわ。

復讐を終えるとアルは高名な魔法使いを訪ねてな、身振りによる魔法のことを伝えたのじゃ。そしてそれを伝え終わるとアルはどこへともなく去って行ったということじゃ。

こうしてじゃな、その後の魔法使いは呪文だけでなく、派手な身振りも使って魔法を掛けるようになったということじゃな。

やはり知らない人は変な話をするものだとリタは思った。

それから、サラの話聞いたが、今の話が頭に残っていて、何を話しているのか少しも耳に入らなかつた。その次のカラタ姉さんのお話は、リタを元にしたドラゴンの花嫁の話だったので、大勢の人が聞いていると思うと、恥ずかしくてちゃんと聞いていられなかつた。

カラタ姉さんの話が終ってから、サラと一緒に他の店を見てまわることになった。

「まずは治療師から媚薬を買わなきゃ」

サラがそう言って治療師の天幕の前までリタを

引つ張って行つたが、治療師は中にいなかった。

「あら、どうしたのかしら」

「売り切れつて書いてあるわ」

リタはテーブルの上にそう書いた板が置いてあるのに気付いた。

「ひどいわ！ 瓶を出してあげたのに」

「そうね、どうしたのかしら。あとで治療師に聞いてみるわね」

「とにかくあたしは媚薬を貰えるはずよ。お金は払うにしてもね」

「そうね、媚薬はまたつくればいいんだから、サラにも渡せると思うわ。でも、誰に飲ませるつもりなの？」

「誰でもいいじゃないの。今はまだいいけれど、すぐにでも現れると思うわ。とにかく、これはつていう男が現れた時に、逃がさないように媚薬を持っていたいんだよ」

二人で歩いていると、端切れを売る店が出ていた。

「さあ、さあ、こんないい布はないよ。さあ、娘さんちよつとさわつてご覧よ。どうだいその肌ざわりは。なんとつてこの布はね、先日三番目のお姫様が新調したドレスを作るのに使われた布の

端切れなんだからね。上等も上等、高級品だよ」
サラが手を伸ばして端切れに触り、うっとりした表情になる。

「まあ、本当にいい肌ざわりね。それに色も鮮やかに染めてあるし。どう、リタ、これでリボンでも作らない？」

「だめよ、あたしはいつもあの黒い服だもの。派手なりボンは似合わないわ。それにお姫様の服に使った布なんて贅沢過ぎるわ」

「大丈夫よ、きつとあれは嘘だから」

嘘というのは考えてもみなかったが、確かに端切れとはいえお姫様のドレスに使われた布がこんなところに出まわるはずはない。

「じゃあ、サラがりボンにすればいいわ。それでよさそうだったら、時々貸してちょうだい。お金は半分出すわ。それでいいでしょ」

「得なんだか損なんだかわからないけど、それでいいわ」

今度はリタがサラを引っ張って、鞆を売っている店に行った。

「リタ、鞆は高いわよ。端切れとは違つものよ」
「見るだけでも見たいの」

リタは治療師が薬草の小袋や、軟膏の瓶を入れ

て持ち歩いてゐる鞆を見て、そういう鞆が欲しくなつたのだ。将来、治療師になつたら必要になるに決まつてゐる。だったら、今のうちに買つてもいいのではないか。

サラの言つように鞆は高かつた。祭りで客は小銭で安いものを買う。鞆を売る店には客は来ていなかった。

店には治療師が持つてゐるような鞆が置いてあつた。堅い革で出来ていて力のかかるところは鉄の留め具で補強してある。しかしそれはいかにも高そうだつた。

「これはおいくらかしら」

それでもモリタは値段を聞いてみた。

鞆を売つてゐたのは行商人ではなくて、鞆作りの職人のようだ。大きな体と太い腕をしていて、あまり愛想がよくない。

「お父さんへのプレゼントかい？ でもお嬢さんが買うにはちよつと高いと思つよ」「よ」

値段を教えてください。それだけ高いということだろつか。

「あたしが使いたいの」

「それはどうかな。ちよつと持つていらんよ」

言われるままに持つてみると、ふつつに手に提

げても靴の底が地面に着いてしまう。それに中身が入っていないのに結構重い。治療師の靴だつてこれよりは軽い。

「やっぱりこれはやめるわ」

「そうだろう。お嬢さんが使うなら、こっちの方がいいだろうよ」

職人が指したのはもっと小さい靴だった。同じような形をしているけれど、持ってみるとさっきの靴よりずっと軽い。

確かに軽くて持ちやすいし、底を引きずったりもしないのだけれど、なんだか子供用のおもちゃの靴みたいで治療師の仕事靴という気がしない。

「これはいくらなの」

職人の答えた値段はやはり安くはなかったが、先日治療師からもらったお金で支払える範囲であった。

リタはしばらく買おうかどうかしようか悩んでいた。

「あら、素敵な靴じゃない。それだったら、あたしが欲しいわ。半分ずつお金を出して、交代で使うっていうのはどう？」

「だめよ、だって仕事に使うつもりなんだから」

「おや、おや。何の仕事に使うんだい」

「治療師よ。まだ見習いだけど」

「一人前になってから買ったたらどうだい。それまでに背も伸びるだろうし」

リタとしては鞆が地面についてしまうのが問題なので、もう背が伸びてから買うというのは正しい考えのように思えた。

「そんなこと言ったら、ものが売れないでしょ」

「ははは、いや、まったく」

サラが鞆職人に文句を言っているのを聞きながら、店に並べてある他のものを見てみると、革紐があるのに気付いた。何も買わないのも悪いような気がしたし、薬草採りに持って行く大袋の紐が傷んでいたのを思い出したので、リタはそれを買うことにした。

「この紐はいくらかしら」

「ああ、それは鞆を買ってくれた人にあげるおまけなんだよ。鞆用の革を取った余りだからね。欲しければ、あげるよ」

「もう、何言ってるのよ。向こうで布の端切れを売っているの知らないの。端切れ専門なのよ。あんたも、鞆なんかしまつて革紐だけ売るといわ。リタ、それは五本まとめてこの値段よ」

「いや、まいったな。うちの女房以上だ。いや、

そんなにはもらえないよ。わかった、じゃあ十本にしよう」

それでリタは革紐を十本買った。

また二人でぶらぶら歩いていると、豚飼いがいたのでリタが声をかけた。

「ペタニおばさん」

「ああ、リタ。楽しんだかい」

「ええ」

「あたしゃ、豚に昼の餌をやらなけりゃならないんでね。一度帰るとこなんだよ」

「あつ、あたしも治療師の食事を作らないと……」

リタがそう言つと豚飼いは大声で笑いだした。豚の餌と治療師の食事が一緒になったのがおかしいらしい。

「治療師なら、さつきソーセージを齧りながらビールを飲んでいたから、昼は食べないんじゃないかね」

よつやく笑いおえた豚飼いがそう言った。

「でも聞いてみないといけないわ。まだお酒のところにいるかしら」

「きつといるだろうよ」

「じゃあ、あたしは治療師を探してくるわ」

「夕方にダンスがあるから、それまでには戻っ

てきて踊るつもりさ。リタ、よかったら一緒に踊らないかい」

「まあ、今年は誰からも誘われないだろうって思っていたけれど、ペタ二小母さんから誘われるとは思わなかったわ」

「もう何言ってるのかしら、女どうして踊ってもおもしろくないでしょ」

「ははは、音楽に合わせて体を動かすのが楽しいのさ。それがダンスってもんだろ。じゃあ、リタ、ダンスの時にな」

豚飼いが帰った後、リタはサラと一緒に酒を出しているところに治療師を探しに行った。治療師はいい気分でワインを飲んでいた。

「治療師、お昼の食事の支度はしなくてもいいのかしら」

「ああ、いらぬよ。酒があれば十分だよ」

「そんなお酒ばかり飲んでいたら、治療師が病気になるてしまうわよ」

「見習いの癖に何を言っているんだい。あたしゃいつだってほどほどに飲んでるんだから大丈夫だよ。それよりお前も飲んだらどうだい。飲んで収穫を祈ろうじゃないか」

「どうしてお酒を飲むことが収穫を祈ることに

結びつくのか、あたしにはわからないわ」

「それはだね、お酒が穀物や果物から作られた最高のものだからだよ」

リタは酒飲みの理屈にはついていけないと思
い、治療師の耳元でサラの分の媚薬をどうして
売ってしまったのかと尋ねた。

「あれはサラのお母さんが買っていったんだよ。
うちの香水の瓶みたいだって言ってたから、瓶
代を引いて売ったんだよ」

治療師も小声で答えた。

そついうことなら仕方がないだろうとリタは
思った。そしてそのことをサラに伝えた。

「もう、お母さんは結婚してるんだから媚薬な
んで必要ないのに」

サラはそう言ったが、治療師に非はないとい
うことは認めてくれたようだ。

「それはわかったわ。じゃあ、二人で何か食べ
ないこと。リタはお客しかやってないからいい
けど、あたしはお話もしたからその分お腹が空
いてるの」

「そうね、ソーセージはどこかで売っているら
しいけれど」

「でも、喉が渴いたからお茶が飲みたいわ」

そんなことを言いながら一人で歩いてみると、マルカ母さんたちのお菓子のお店に行き当たり、そこでお茶も出していることがわかった。

「何か面白いものはあった？」

マルカ母さんがお茶を出しながら聞いてくれた。

「あっちのお菓子を売る店で、生姜の砂糖漬けを売っていたわ。それから、天幕で隣村のお婆さんがなんか変なお話をしていたわ」

「リタは変なものが好きなのよ。生姜の砂糖漬けなんて辛くて食べられないわ」

サラが隣から口を挟んだ。

「あたしはやっぱりマルカ小母さんのお菓子が一番おいしいと思うわ」

「はい、はい。じゃあ、たくさん食べていってちょうだいね」

「なんだか今日のお菓子はちょっと甘すぎる気がするわ」

「そうね、リタ。いつもより甘くしたのよ、お祭りだから」

「毎年そうだった？」

「そうよ、お砂糖の収穫を祈って甘くしてあるのよ」

「お砂糖って収穫したかしら？」

「ふふふ、さあ、どうかしらね」

リタとサラは食事の代わりにお菓子を食べた。サラはその後も見てもわりたと言ったが、リタはもうだいたい見てしまっていたのでサラと別れて治療師の家に帰った。

お祭りのにぎやかな雰囲気は好きだけれど、なんだか疲れてしまう。半日くらいならいいけれど、一日はちよつと長いとリタは思った。

しかし夕方のダンスには行かなければならないから、少し休もうと思つて椅子に座った。しばらく座っていたら、ただ座っているのもつまらない気がしてきて、いつもの日課の書き写しを始めた。

ふと気がつくと、日が傾いていた。

「なんだい、お前は。祭りの日にまでそんなことをやっているのかい」

いつものまに帰ってきたのか、治療師の声にリタは驚いた。

「薬事全科の豊作を祈つてたのよ」

「そんなもんが豊作になるもんかね。あたしやもう寝るから、お前は帰っていいよ」

「夕食はどうするの」

「いらぬ。ちと飲み過ぎた」

治療師が寝てしまったので、リタは一人で夕食を食べた。それから豚飼いとダンスするためにもう一度丘に登った。

ダンスはまだ始まっていなかったが、酒や食べ物売る店を除いて、ほとんどの店は片付けられていた。片隅では笛や鈴などの楽器を持った一団が適当に音楽を演奏していた。気の早い人はその適当な音楽に合わせて勝手に踊っている。豚飼いを探して歩いていると、その前にガルド父さんに出会った。

「おお、リタじゃないか。今日は父さんと踊ってくれるだろうね」

「ええ、でもペタニ小母さんと約束しているから、その後でね」

「どつして一番に父さんと踊ってくれないんだね」
風のように現れたマルカ母さんが口を挟む。

「あなたこそ一番最初はあたしと踊ってくれるんじゃないの?」

「あー、いや、三人で踊ろうかと思っていたんだよ」

「そんなステップがあるもんですか。最初はあ
たしと、次にリタと踊るのよ、わかった」

「平和のために、そうしよう」

豚飼いが見つからないかと思っていたら、ズボン
を履いて男装していた。

「そんな格好をしているとは思わなかったわ」

「リタと踊るんだからね、女の格好じゃおかし
いと思ったださ」

「でもそれじゃあ、今日は男の人とは踊らない
の？」

「だってリタと踊るんだからね」

「でも、ずっとあたしと踊るつもりだったの？
あたし、お父さんと踊ることになってるんだ
けど」

「構わないさ。リタが踊りたくて、相手がいな
い時はあたしが一緒に踊るっていうだけさ」

「それならいいけど……」

そんなことを言っているうちにダンスの音楽が
流れ出し、みんながだんだん踊りはじめた。リ
タは豚飼いと踊り、ガルム父さんと踊り、また
豚飼いと踊った。

豚飼いはリタが踊り疲れて休んでいる間に、別
の村娘と踊ったり、男の人と踊ったりしていた。リ

夕はそれを見て少し安心した。豚飼いがまだリタの怪我に対して責任を感じているとわかったが、それはリタにはどうしようもないことだった。

サラの姿が見えないのでどうしたのだろうと
思っていると、豚飼いが教えてくれた。

「サラならさつきよその村のハンサムな若者と踊っていたよ。広場の外れの方でね、音楽もよく聞こえないだろうにね」

サラは素敵なお相手を見付けたのだろうか。あとでぜひ聞かなければとリタは思った。

ガラム父さんと豚飼いという体力のある二人が順番に踊りに誘うのでリタはその晩踊り疲れ
てくたくたになった。